

救急カートの整備点検の現状と標準化の検討

救急救命センター病棟（専門領域看護師連絡会）

村 松 美代子 白 鳥 美代子

I. はじめに

当院では平成 15 年より病棟と外来の救急カート（24か所）がすべて統一された。平成 17 年より救急救命認定看護師の活動の場として専門領域看護師連絡会が発足し、救急部会では、急変対応に必要な救急カートが常に準備よしの状態にあるのかを、チェックシートを作成し点検ラウンドを行ってきたが、いつでも使用可能な状態に整備されていない所もあることがわかった。そこで今回、なぜ救急カートが確実に整備点検されていないのかその原因を明確にし、救急カートに対する意識を知るためのアンケートを実施した結果、改善点が明らかになったので報告する。

II. 研究目的

救急カートの確実な点検整備のための改善点の明確化

III. 研究方法

病棟看護師 120 名、外来看護師 10 名各部署で経験年数が重ならないように配してもらい、無記名による質問式アンケートを実施。その結果を分析しクロス集計にて検討した。

IV. 結 果

アンケートの回収率は 98%で有効回答数は 98%あった。マニュアルに沿った内容であるのかに対し 98%がはいと回答。保守点検については 83%が月 1 回の定期点検を実施していた。使用毎の点検は 77%が実施していたが薬品のみ補充するという意見もあった。使用した挿管用具の消毒は部署によって様々であり、また挿管に当たったことがないため知らないという意見もあった。バックバルブマスク

（BVM）汚染時は水洗浄し再組み立てを行なっている部署や、使用したことがないため知らないという意見もあった。整備点検のマニュアルについては 62%の人が知っていると回答。救急部会によるカートラウンドについては 77%の人が知っていると答えたが経験年数の浅い 1~3 年目のスタッフほど知らないと回答した。またアンケートより外来よりも病棟のほうが月の点検回数が多いことも分かった。

V. 考 察

今回のアンケート調査より、急変に遭遇する機会が少ない部署ほど点検回数が少なく、カートの点検整備の重要性の認識が低く、カート内容の把握が不十分であり物品の使用方法を知らない事が明らかとなった。また、急変対応の知識・技術については個人の経験による差が大きかった。カートの整備はもちろんの事、いつ急変に遭遇しても対応出来るよう個人の知識・技術を向上させる必要がある。しかし部署により急変に遭遇する機会には差異があるため、それらを補えるようなカートの点検整備方法に改善する必要があると考えた。改善策として

1. 経験に関わらず確実にカートの点検整備が出来、急変対応の知識・技術が習得できる点検整備マニュアルに改訂する。

2. 点検ラウンドではマニュアルが活かされた点検整備が実践されているのか、確認・指導をする以上の改善点を踏まえ現在は救急カート管理マニュアルを作成し、挿管準備の実践を組み入れ、薬剤の作用・副作用の表を作成し各部署に配布した。今後もカートの確実な点検整備の重要性が認識されるよう活動を継続していきたい。